

平成30年11月15日(木)

「涙もろい日々」

福島高校と、喜多方高校の周年行事に出席して思うことがあった。

校歌は学校のアイデンティティだ。老いも若きも大きな声で、全力で歌を歌うことによって同窓生はつながるのだ。

今年の甲子園の金足農業の校歌斉唱もしかり。あれだけ、全力で歌われたら悪い気がしない。誇りさえ感じてくる。

本校の校歌斉唱も皆大きな声で歌うのだけれど、応援団長だった加藤君と団員であった小松君は、とりわけ大きな声で歌うことをはばからない。この姿勢こそ応援団であったことへのこだわりであると理解する。こんな大きな声で卒業式も歌われた日には、私は涙に暮れてしまう。

ましてや、苦楽を共有した者たちが、泣き始めたらただ事ではない。もはや我慢できずに嗚咽して号泣するだろう。

磐城高校に勤務して、平成15年3月1日の卒業式には、涙が止まらなかったし、平成17年3月27日の離任式にも泣いてしまった記憶がある。それでも、校長という立場で泣いてはいられないとは思いつつも、どうなることやらその日にはならないとわからない。

ただし、その日までには、まだまだ乗り越えていく試練は続くのだ。生徒諸君とともに一つ一つやり遂げていく中で、越えていくしかないと思う。

「磐城は、負けられない。磐城はなめられてたまるか。磐城は妥協はしない。見せるぞ磐城。見せてやれ、我が磐城高校生徒諸君。」